石垣

姫路城内で現存する最も古い石垣である。1580 年代、武将豊臣秀吉（1537-1598)が勢力を広めだした頃は、この辺りは小さな城塞に過ぎなかったと思われる。秀吉は 16 世紀終わり頃、1 世紀以上にわたる内戦の後、日本のほぼ全域を勢力下に治めた。

当時の有力な領主のように、秀吉は築城を家臣に命じた。家臣は築城に必要な労働力や資材などをそれぞれの所有地から調達していた。この時代のほとんどの石垣はデコボコで、加工されていない石が使われている（野面積-下記参照）。しかしながら、日本の城郭建築技術は 16 世紀に急速に発達した。17 世紀の始めまでには石垣はより手間をかけて整形され、滑らかで隙間ない外観を作ることができるようになった。

姫路城石垣の変遷

野面積（積上型石垣）

この種類の石垣は 16 世紀後半の秀吉の時代のものである。使われている石は主に凝灰岩か堆積岩で、大きさも多岐に渡っている。職人は場合によっては古い石臼や墓石、石棺をも使って既存の材料をリサイクルした。後世の石垣に比べ、野面積の石垣は角度が緩やかで登りやすい。

打込ハギ（クサビ型石垣）

この石垣は 17 世紀の始めに姫路城を拡大、改修した大名池田輝政（1565-1613)によって築かれた。

「扇の勾配」と呼ばれるカーブを描き、上向きに傾斜している。石の整形と設置については粗いところもあるが、石垣の隅角部は、レンガ造りのように正確に整えた石を交互に組み合わせた算木積と言われる方法で補強されている。

切込ハギ(面取り型石垣)

このタイプの石垣は三の丸の一部で見ることができ、本多忠政(1575-1631)によって築かれた。姫路城では一番新しい石垣となる。石工はのみで正確な形のブロックに整形し、隙間なく積み重ねている。この石垣の上段はしばしば完全に垂直に整えられている。